

世界が変わるといって 手応え



A児

Sさんに借りた本物のトンカチ

レンガの欠片が飛び跳ねるため、子供たちは急ぎ「ゴーグル」を製作し、宝石の発掘作業を再開した。

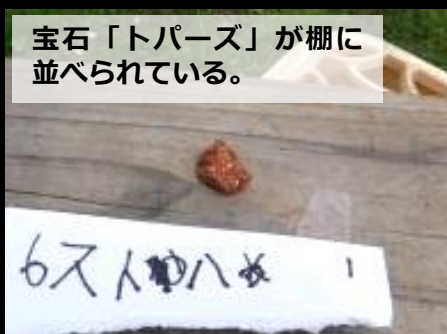
対象と自分との関わりとは？



C児

D児

本物のトンカチで粉々に砕かれたレンガや、使わなくなった木製・紙製のトンカチらが混在するテーブルの上で、「宝石」を慎重に取り出そうとしている子供たち。



宝石「トパーズ」が棚に並べられている。

トパーズ

「Sおじさんなら持つてるかも！」
Sおじさんとは、園の様々な整備をしてくれる作業員さんのことだ。Sさんは非常勤務職員で、子供にとつては大切な環境の一つ。草木を刈ったり遊具を修理したり、いつも特別な道具を使って園の手入れをしてくれるSさんは、憧れの大人であり、困った時のSおじさんであった。
辺りを見渡すA児。園庭の畑で作業をしているSさんがすぐに目に留まる。A児は、早速Sさんの所に行く。本物のトンカチが必要な状況なんだというこを、あれこれと熱弁子供からのお願いは慣れているSさん。今日はどうしたと、真剣に耳を傾けた。トンカチとなれば、Sさんに

も貸し出す責任がある安全に使うための約束事を、そばで見守っていた担任も一緒に、Sさんから沢山教わることになった。
ようやくトンカチを手に入れたA児たち。Sさんからは、「これは「特別」に貸すものだ」と言葉を掛けられた。僕たちだけの「特別の道具」。わくわくと、どきどきが混在する。A児はハンマーを振り下ろした。キーン。明らかにこれまでのトンカチとは威力が違う。「これはいい」とA児。振り下ろすたびに力が増していく。カキーン。A児「うわっ、石が顔に飛んでくる！」
B児「確かに危険だ！」
A児「いいこと思いついた！」
勢いよく室内に戻るA児。まもなく戻ってきた

たその顔には、ゴーグルが掛けられていた。
B児「僕もつくる！」
ゴーグルをかけた子供たちの宝石発掘が再開。しばらくすると、砕かれた石の欠片や粉、宝石でテーブルがいっぱいになる。それを見たい担任は、長板とビールケースで即席の棚をそうと準備した。こ担任「宝石の棚はここでいいかな」
A児「うん、いいね」
C児「棚に並べよう」
次の日、凶鑑を持ってきたC児たちが、宝石の名前を調べている。
C児「これはルビー」
D児「トパーズかも」
宝石博物館にイメージを広げたようだ。通りがかった友達に、宝石のあれこれを熱弁するA児たちの表情は、キラキラと輝いていた。「年長児5月の事例」

対象が変化し、それに気が付き、次の行為が生まれ、心情・態度が育っていく。自分なりに試し、考えることが繰り返され、対象を自分との関わりの中で捉えるようになり、世界をもっと好きになっていく。大人も一緒に先を予想して想像して、期待して、何よりその子に託すのを願って、援助していく。幼も小も似ていますね。

幼児教育側の3要領・指針と同様に、小学校学習指導要領についても改訂に向けて協議が行われています。その中で、**生活科がもつ4つの本質的意義**①身体性②自己認識③対象と自分との関わり④他者と自分の関わりについて議論されています。生活科は**幼児教育との結節点**です。例えば⑥は、「触る、試すといった働きかけによって身近な物事の変化し、世界が変わるとい**う手応え**を得る。その経験がその子の「なぜ？どうして？」の好奇心や探究心を生み出していく」とい**う捉え**です。やりた**い**ことを試すうちに

